

# 経済ナウキヤステイングの時代

渡辺 努

一時間後の文京区本郷の降水確率がわかる時代になつた。気象の分野では「ナウキヤステイング」と呼ばれているそうだ。遠い将来の予測を意味する「フォーキヤステイング」ではなく、近い将来を知るということだ。

ナウキヤステイングという言葉は経済の分野でも使われ始めている。しかし経済で使われる場合は近い将来というよりも、近い過去だ。最近有名になつた例に、米国の中銀のアトランタ支部が始めた「GDPナウ」というのがある。GDP<sup>11</sup> 国内総生産は一国の景気の良し悪しを測る重要な

だ。しかしナウキヤステイングは、過去のサイコロの目が何だったかを知る作業だ。少なくとも神様は何だったのかを知っている。人間は神ではないので過去といえども全て知つていいわけではないが、過去に起こつたことなのだから、必死に頑張れば知ることができるはず。これがナウキヤステイングの出発点だ。

では、どうやって足元の経済の状態を知るのか。カギはビッグデータだ。株式市場での取引は全て電子化されており、売り買いの注文や値動きは全てコンピュータに記録される。同様に、金融機関や企業の行う様々な取引も、全てコンピュータの中にある。ビジネスの現場で生成される業務データを経済指標の作成に流用しようというわけだ。

筆者の研究室では「東大日次物価指数」という物価指標を公開してきた。スーパーのお客さんの購買（誰がどこで何をいくらで何個買ったか）はレジに設置されたスキヤナーがピッと鳴った瞬間に記録される。その記録を深夜に東大まで送信してもらう。そうしたデータが約三百の店舗から集まり、夜のうちに東大のコンピュータが物価指標を計算し直ちにホームページで公開する。物価を

経済指標で、米国政府が作成している。しかし四半期に一度しか公表されない。しかも、公表までに一ヶ月以上かかる。GDPは様々なニュースが日々飛び交う株式市場の参加者が最も注目する指標ではあるが、いかんせん遅い。経済のスピードについていけない。GDPナウはGDPをもつと頻繁に、もっと迅速に測ろうという試みだ。神様がサイコロを振つて経済現象を決めているのだとすれば、フォーキヤステイングはサイコロの目を予測する作業だ。最先端の統計手法を用いてもサイコロの目を誤差なく予測することは無理

毎日知ることができ、しかも前々日のものがわかる。月一度だけ、一ヶ月以上遅れての公表という政府の物価指標とはスピード感が違う。

東大指数は物価のナウキヤステイングだ。東大指数は、物価の安定に責任をもつ日本銀行の黒田総裁の講演にしばしば登場し、国会の論戦でも言及されている。公表開始から三年が経ち金融市场関係者の注目を集め経済指標となつている。同様の物価指標はMITの研究グループも公開しているほか、AdobeやGoogleなどもナウキヤステイングに関連するサービスを開拓している。

人々はできるだけ早く（できれば他人より早く）経済情報を入手したい。その欲求に応えて大学や企業が情報提供する。その情報を利用することで人々の意思決定の精度が高まり、経済全体の効率も高まる。これがナウキヤステイングで実現する社会だ。個人的には、早く知つて早く行動するというのは何とも忙しい話で、できれば避けたいという思いもある。しかし筆者のそんな思いとは全く関係なく、ナウキヤステイングのサービス展開は内外で着々と進んでいる。今後数年でビジネスと生活の現場を大きく変えていくだろう。